
Bledisloe Cup in Tokyo

「そんなんでできるんですか？」

2019年ラグビーワールドカップ日本開催決定時の正直な感想です。歴史を辿れば、ラグビーはイギリス発祥のスポーツで、フットボールをしていたエリス少年がボールを持って走り出したことからスタートし、ルール化されて現在に至ります。これは、ロンドンの北西に位置するラグビーという田舎町の出来事で、その地名が競技名となり、4年に一度開催のワールドカップの優勝杯は、エリスカップと名付けられました。



今までエリスカップを手にした国は、イングランド、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカだけで、開催地もホームユニオン(イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド)とフランス、上記の南半球3ヶ国の強豪国と限られていたのですが、ワールドカップ史上たった1勝しかしていない日本開催があるとは、夢のような話です。



IRB(国際ラグビーボード)は、日本開催決定のお土産として、なんと、ブレディスローカップの1試合までプレゼントしてくれたのです。ブレディスローカップとは、ニュージーランドとオーストラリアの国際試合を言い、年に2~3回開催され、その年の勝利の多いチームにこのカップが渡される定期戦です。これは、ワールドカップなんてものが無かった時代から続く伝統の対抗戦で、タスマン海を挟んだ両国のプライドをかけた大会で、モチベーションの違いが明らかです。子供の頃からラグビーボールに親しみ将来の目標は国代表のプレーヤーになって、ブレディスローカップを祖国に持ち帰るの

が夢ですから、選手だけでなく観客の目も違います。

両国でもシドニー、オークランド、メルボルン、クライストチャーチなどの大都市のビッグスタジアムでしか開催されないお祭りみたいな大会が、昨年の香港に続いて東京にやってくるなんて・・・
「ほんま、エッ、そんなんでできるんですか？」

当日、スタジアムで森喜朗元総理が「ブレディスローカップが、目の前で観戦できるなんて、1ラグビーファンとして夢のような出来事です。」なんて日本ラグビーフットボール協会会長としての挨拶で語っていましたが、全くもって同感。お代官様夫婦も、この夢のような一日を体感するために東京に行くことにしました。



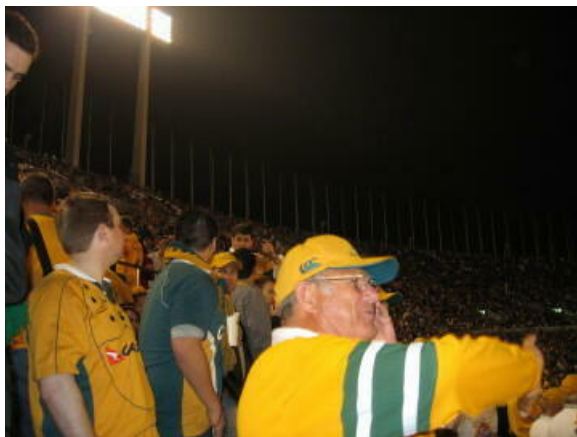
2009年10月31日17時30分キックオフ。座席はカテゴリー1と言って、バックスタンド中央前方で1枚2万円。お土産付きのプレミアム・ピッチシート7万円の次のグレードの座席で世紀の一戦を観戦することにしました。恵まれていたのは、すぐ真横が外国人席で左を向けば、ワラビーズカラーの赤ら顔の目の肥えたラグビーファンがいっぱいで、キックオフまで現地同様のパブ状態で、あちこちでビール片手に盛り上がっています。オールブラックスの選手紹介にブーイング、ワラビーズ選手紹介には大拍手、オーストラリア国家斉唱の時は、大合唱というビッグゲーム独特の雰囲気伝わってきました。



オールブラックス・サイドも、セレモニーに生けるレジェンド、暴走機関車と呼ばれたかつての名ウイング、ジョナ・ロムーがご挨拶。両国国歌斉唱の後には、戦いの儀式「ハカ」(ウォークライと言った方が一般的かも知れませんが)で気合いを入れます。



国立競技場入場者数は、4万5千人で満員御礼と表現するのが最適でしょう。リッチー・マコウ率いるニュージーランド代表・オールブラックス。ロッキー・エルソム率いるオーストラリア代表・ワラビーズ。注目は、ダン・カーターとマット・ギタウのスタンドオフ対決。2007年のフランスW杯で結果が出せなかったオールブラックスは、2011年の自国開催のW杯に向けて立て直しをはかり、カーターが復活して最高の仕上がり。ワラビーズはセンターに前キャプテンのモートロックを欠き、新旧交代時期で苦しいお家事情での遠征。



夢にまで見たブレディスローカップのキックオフです。

前半戦の立役者はオールブラックス、ウイングのシティヴェニ・シヴィヴァトゥ。フォワード、バックスが一体化したお手本みたいなトライを決めた後に、危険なタックルを放ちイエローカード。シヴィヴァトゥがシンビンで、人数が少ない間にワラビーズが逆転。今回は、世界標準の「ビデオ判定」が採用され、センターのピーター・ハインズの右隅へのトライが認められました。前半を終え得点は13対16でワラビーズがリード。

後半早々、オールブラックス、センターのコンラッド・スミスがモールから出てきたボールをインゴールに運びトライ。以降は、敵陣でペナルティーを得れば、確実にペナルティーゴールを狙って3点を重ねるといふ国際試合独特の雰囲気、ラグビー観戦初心者には、少し退屈な流れになったかもしれません。

両チーム共に攻撃だけでなくディフェンスも超一流ですから、敵陣を深く破れないので相手の反則でもらったペナルティーゴールで確実に得点し、それでも破れない場合は、ドロップゴールという戦法を取るのが主流とされ、勝つためには今回のオールブラックスのカーターみたいな確実なキッカーを配置することが第一とされています。

終了間際には、ワラビーズ最後の展開がありましたが、ハンドリングエラーで万事休す。結果は、32対19とカーターが積み上げたポイントによるオールブラックスの勝利で、今年のブレディスローカップ

プのトロフィーは、ニュージーランドが手にしました。今回のマン・オブ・ザ・マッチはオールブラックス・キャプテンのリッチー・マコウと発表されましたが、ノーサイドの笛が吹かれた後は、南半球から赤道を越えてやってきて本場のプレーを見せてくれた両チームの皆さんに大きな拍手、そして皆さんにメン・オブ・ザ・マッチを捧げたいと思います。



東京・国立競技場で過ごしたラグビーファンとして最高の一日。幸せすぎて、感想は・・・
「エッ、そんなんでできるんですか？」

また、翌日は東京タワー見学。ブレディスローカップに合わせて、ニュージーランドW杯と観光のピーアール活動で巨大ラグビーボールが、東京タワーの足元に登場。ボールの中は内側をスクリーンとして、ニュージーランドの大自然が写し出され、外では先住民マオリショーなどなど。ほんと、時間とお金が許すなら2011年のW杯に合わせてニュージーランドを旅したくなりました。



平成21年11月3日記

Top
[トップ](#)
[↑](#)

Back
[戻る](#)



[ブレディスローカップ～シドニー\(2010年9月11日\)](#)